れ　連携は接点探しから

まちが抱える課題は多岐にわたり複雑になってきている。課題解決は行政の力だけでは限界があることもわかってきている。一方、住民の側には課題解決のためにできることはしていこうという意識と具体的な取組が広がってきている。また、それらの活動を応援する中間支援組織のような活動も生まれてきている。そこで重要なのはそれらの思いや活動をつなげて課題解決の大きな力にしていくことだ。ところがそれがなかなか難しい。

ＮＰＯのようなテーマ型の活動団体は、町内会などより専門性が高く課題に対して的確な活動ができるという自負がある。一方、町内会、自治会といった地縁組織は歴史も長く、その間、継続的に地域のために活動をしてきたという自負もある。昨日今日できたような団体とは違うんだという意識があるし、テーマ型の活動団体は自分たちの関心ごとにしか関わらず、地域課題に広く対応している自分たちとは違うという気持ちもある。そうなると簡単に連携しようということにはならない。

ずいぶん前になってしまうが、廃校になった小学校の活用で両者が対立することがあった。地域の思い出がいっぱい詰まった小学校の建物を、行政が地域に縁もゆかりもないアート系の複数のＮＰＯ団体に貸し出したのが発端だった。両者の関係づくりをコーディネートすることになったのだが、話し合いはいつも険悪な雰囲気で困ってしまった。その時に、行政の地域担当の方が町内会の会長のお宅を訪ねた時に偶然見たものが両者の関係を大きく動かすことになった。そこで見たのは立派な落款が押された「書」。聞くと書いたのは会長で落款は地域の友人が彫ったものという。さらに話を聞くとその地域には陶芸や絵画、彫刻、工芸などの達人がいることがわかったのだ。そこで行政の地域担当の方が考えたのは学校の大きな部屋を使った地域の方々の作品展覧会の開催。それをアート系のＮＰＯ団体がサポートするというものだった。持ち込まれる作品の分類と展示はＮＰＯ団体がお手のもの。町内会の会長はじめ地域の方々はＮＰＯ団体の手際の良さに感嘆し、展覧会も予想をはるかに超えた多くの人が訪れた。その後の両者の関係は嘘のように変わり旧知の仲のようになったという。まさに「連携は接点探しから」ということだ。